

はしがき

人類社会は、第一次産業革命を境にして人口、経済とエネルギー消費、環境負荷など爆発的な成長・拡大を遂げてきた。中でも20世紀後半からの大量生産・大量消費・大量廃棄・大量汚染に象徴されるように、経済発展と技術進歩による更なる快適で豊かな生活を追求する一方で、経済格差・ジェンダー・環境の悪化・貧困と飢餓・水や食料問題など、私たちの目の前には解決すべき経済、社会と環境といった多岐にわたる地域規模と地球規模の課題が山積し、そのうえ昨今の新型コロナウイルス（COVID19）の世界的大流行により世界経済は大きく低迷し、生活様式も大きく変革しようとし、人類を取り巻く生存空間と資源環境の限界性から地球システムと人類社会のサステナビリティ（sustainability、持続可能性）が重大な岐路に立たされている。

そのため今日、人類社会のサステナブルな発展に向けて、世界共通の取組が展開されている。中でも2015年の国連サミットにおいて全会一致で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）は、先進国・途上国すべての国を対象に、2030年に向けて「地球上の誰一人取り残さない」（leave no one behind）という社会的包摂・経済成長・環境保護の3つの核心的要素のバランスのとれたサステナブルな社会の実現を目指した普遍的な取組であり、世界共通の目標である。

一方、「サステナビリティ」という思想・概念は、人類社会の誕生、進化と発展に伴ってきたものと考えられるが、1992年の「地球サミット（リオサミット）」が「サステナビリティ」の概念を世界的に普及させるきっかけとなった。2000年の国連ミレニアムサミットでは、SDGsの前身であるMDGs（Millennium Development Goals「ミレニアム開発目標」）が採択され、主に発展途上国の貧困・教育・健康・環境などを改善するための社会開発を目標に掲げていた。以来、サステナビリティを概念から実践へ移行し、持続可能な社会を実現するための模索・実践が盛んに展開されてきた。

さらに、「サステナビリティ学 (sustainability science)」が21世紀初頭から学問として提唱され、その構築も国家、地域、都市、企業、製品などという空間的尺度から、または社会、経済、環境、制度などの分野において始まった。ところで、この「サステナビリティ」の理念の理解・定義は論者によって様々であり、その研究の蓄積量も膨大であるため、サステナビリティ学は超学的な学問体系として、いまだ発展の途上といえよう。

人類自身が自らのニーズを満たす方式は、絶えず変化している。また、新型コロナウイルスのような世界的大流行による人類の生存環境も絶えず変化している。そこで、サステナビリティも、不変な状態ではなく、絶えず模索する過程であり、目標も変化し続けている。すなわち、サステナビリティは最後の状態が存在しないといえよう。

SDGs 時代におけるサステナビリティ学は、経済、社会、環境など各分野に跨る複雑な系統である。本書は、従来の学問分野を超えて、環境・社会・経済をシステムの的に思考し、文理横断の専門家によりオムニバスで執筆されたため、理工学系の学生には社会学系の知識を、また社会学系の学生には理工学系の視点からユニークな SDGs 時代のサステナビリティ学を学ぶことを目的とする。

本書は、SDGs 時代におけるサステナビリティ学の理論、実践活動や具体的な対策と課題を述べ、それぞれの学問領域において、サステナビリティをキーワードに、現代社会問題の諸相並びに各章と SDGs との関わりをグローバルシステムの視点から問題の基本構造を俯瞰し、問題を複合的かつ総合的な視点から理解して取り組むことを切口としてサステナビリティ学の入門へと誘う。

最後に、本書の出版にあたり、法律文化社編集部小西英央氏には大変お世話になり、執筆者を代表して心からの謝意を表したい。

2022年初春 於京都

周 瑋生